

EVAR 術後 10 年の遠隔期に突然瘤縮小を得られた一例

腹部ステントグラフト内挿術は腹部大動脈瘤に対する低侵襲治療として確立した。約半数の症例は術後 1 年以内に瘤縮小を得られるが、Type I endoleak や Type II endoleak が残存した場合には、瘤拡大が進行し瘤の破裂を生じるために追加治療を要することが少なくない。症例は 62 歳男性、健康診断で偶発的に診断された腹部大動脈瘤が定期観察中に 5cm に拡大したため手術適応と判断した。EXCLUDER を用いた EVAR を実施し、術後は endoleak を認めなかったが、瘤のサイズは不変のまま経過していた。術後 9 年に前立腺癌に対する小線源治療＋ホルモン療法が行われた。小線源治療終了から約 2 週間後に全身倦怠感が出現し、CT で感染性腹部大動脈瘤が疑われ、当科に入院となった。Endoleak の出現は認めないものの瘤は 53mm と増大し、瘤の左側に瘤と接して淡い造影効果を示す軟部陰影の出現を認めた。WBC 6500x10⁶/L、CRP 11.3mg/dL と炎症所見の上昇を認めたが、血液培養は陰性であった。細菌学的な証明できなかったが、感染性腹部大動脈瘤を否定できないため抗生剤点滴治療を開始した。膿瘍を考慮し、軟部陰影を CT ガイド下にドレナージしたが、細菌培養は陰性であった。瘤の増大がないことを確認して、抗生剤の内服へ切り替えて約 2 ヶ月で退院となった。炎症は改善し、その後 3 ヶ月で抗生剤内服も終了とした。術後 10 年の CT で瘤径は 39mm と縮小し、瘤に接した軟部陰影も消失した。EVAR 後の瘤縮小は通常術後早期に認める。本症例は EVAR 後 10 年で瘤縮小を得られた非常に稀な臨床経過であるため、瘤縮小の因子を考察して報告する。